

「境界」に生きる「モンゴル世界」

ユ・ヒョジョン

本書は、同一または同系の民族としての意識をもちつつも、さまざまな「境界」によって分断され、「境界」によって囲まれた地理的・政治的空間のなかで暮らしている「モンゴル人」や隣接の諸民族の民族としての営みのありようを、20世紀における国家と民族をめぐる世界規模でのより大きな流れを意識しながら、さまざまな角度から考察した4本の論考と、内モンゴルの文学世界を論じた論文、「モンゴル世界」を軸に日本における「東洋史」の成立を論じた論文の2つの特論から構成されている。

ここでいう「モンゴル世界」とは、基本的には「モンゴル人」または「モンゴル系」の人々が居住している地理的空間、すなわち、モンゴル遊牧民の伝統的な生活空間とされるモンゴル高原およびその周辺地域をさすが、必ずしもこれに限定しているわけではない。広域にわたる移動や分散によってモンゴル人またはモンゴル系の人々の居住空間は、それ以外の地域にも広がっているからである。

また、本書における「境界」とは、国家的・地理的な分断線としての国境のみならず、一国内の行政区域間の境界線、さらには

民族識別などによってもたらされた民族間の人的境界をも含むものとして用いる。

このように、「境界」を、一国内の行政区域や「識別」による人的境界にまで広げている点は本書の大きな特徴である。同時に、「境界」を「所与」のものとはせず、境界の設定過程にまでさかのぼり、境界が引かれた経緯を詳細に跡づけることによって、その背後にある国家の意図や、それと絡む形で形成された「境界」そのものに対する関係諸民族の意識、そして、それによってもたらされた民族間関係のありようまでも考察の対象にしている点も従来の研究にはない新しいものであろう。

このような複眼的な新たなアプローチを用いて、国家にまたがって暮らしている諸民族の一つの典型ともいえるモンゴル系諸民族の民族としてのありようを考察する試みは、国境にまたがる他の諸民族の民族としてのありよう、そして、そのみならず、20世紀における民族と国家の関係をより広い文脈で捉え直していくにあたって少なからぬ示唆を与えるものであろう。

もっとも、さまざまな「境界」による「モンゴル世界」の分断や分割は20世紀に始まったものではない。モンゴル帝国の広域にわたる展開やそれによる離散などはさておき、現在の分断状況を考えるうえで重要なのは、清朝初期の17世紀前半から後半にかけて行われた現在の中国・内モンゴル自治区およびモンゴル国（「外モンゴル」）にほぼ重なる部分の清朝への服属と、モンゴル高原の北部地域に相当するブリヤートのロシアへの併合である。こうして「モンゴル世界」がロシアと清朝両帝国に引き裂かれたうえ、清朝の支配下に入った内外モンゴルにおいては、モンゴルの従来の部族制に清朝の八旗制を加えた盟旗制が施行されたことにより、モンゴル人地域は細分化され、横のつながりを遮断される状況が200年以上もつづいた。

こうした状況に大きな変化が訪れたのは20世紀初めであった。「滅満興漢」のスローガンを掲げた辛亥革命が起き、中華民国の樹立が宣言された。それと前後して「外モンゴル」でも独立が宣

言され、これに呼応する形でその接壤地域のフルンボイルでも「独立」が宣言された。フルンボイルは内外モンゴルどちらにも属さず、黒龍江省に含まれていたが、ここにはバルガ・モンゴル人が多く住んでいたうえ、モンゴルに近い関係にあるダウール人が支配的な地位を占めていることもあり、モンゴルへの親近感が強かったのである。外モンゴルの独立宣言に呼応する動きは、フルンボイルのみならず、内モンゴルの各地域においても相次いであらわれていた。つまり、この動きは外モンゴルの独立にとどまらず、モンゴル人（モンゴル系）地域の統合運動の様相を帯びていったのである。この内外統合への動きは、モンゴル人の期待にかなわず、ロシアが消極的な態度をとったこともあり、失敗に終わったが、統合への試みはあきらめられず、1940年代半ばすぎまで間断なく続くことになる。こうしたなかで、外モンゴルだけが、1917年のロシア革命やそれにつづく内戦のなかで1921年に実質上の独立を果たし、第2次世界大戦直後に中国の承認をも取りつけた。これによって内外モンゴルが国境によって分断される状況が固定化し、今日に至っている。

他方、中国に残されることになった内モンゴル地域には中国共産党主導のもと、1947年にフルンボイル地域を含める形で「内モンゴル自治政府」が設けられ、中華人民共和国建国直後、「内モンゴル自治区」となった。そして、そこに暮らしていた「モンゴル系」の人々は、1950年代における「民族識別」によって「モンゴル族」と「ダウール族」などに分かれて識別されることにより、それぞれ独自の民族としての道を歩みはじめることになった。

もっとも、「内モンゴル自治区」は中国領内の「モンゴル族」のすべてを包含するものではなく、その域外にも多くの「モンゴル族」が暮らしている。この自治区の外に残された人々は、かれらが住む地域の歴史的状況や当該地域に占める人口の割合などの諸条件に基づいて設定された「自治県」や「自治州」、または「民族郷」のなかで民族としての暮らしをしていくことになったが、諸条件や状況の違いを反映して、民族生活のありようはそれ

ぞれ異なる様相を示しており、民族郷すら与えられていない場合もある。

このように、同じ国家に住む同じ民族であっても、住む地域が「民族自治地方」か否か、または自治区域が設定されている場合においてもどのレベルのものか、によってそれぞれ異なる民族生活を営むことになった状況は、行政区画という、いわば「見える境界」がもたらしたものと見える。これに対し、居住地域はそれまでと同じでありながらも、「民族識別」によって「同系」とされていた人々がそれぞれ別の民族として区分・分離されていく状況は「見えざる境界」による分離・分断と呼ぶことができよう。

本書第1部の2つの論文は、こうした中国建国以降に新たに設定された2種類の「境界」をそれぞれ取り上げたものであるが、第1章は「見える境界」、第2章は「見えざる境界」を主たる研究課題としている。しかし、いずれにおいても2種類の「境界」をともに意識した内容となっている。

第1章のブレンサイン論文は、内モンゴル自治区に隣接している遼寧省、吉林省、黒龍江省のいわゆる東北三省のモンゴル族の状況を題材として「見える境界」の成り立ちや、そのなかでのモンゴル族の暮らしを考察している。モンゴル族は内モンゴル自治区に隣接している部分に設けられたいくつかの自治県に集住しているが、これらの地域は清朝期には、ほかのモンゴル人地域と同様に「外藩モンゴル」とされ、「モンゴル人」の地域としてしかるべき認知と管理がなされていた。ところが、清末から中華民国時代になると、漢人による開墾によって四分五裂になった内モンゴル東部各旗は近隣諸省に分割統治されるようになり、モンゴル旗としての独自性は弱まっていった。満洲国時代になると、それまでに失われていったモンゴル旗の権益がいったん取り戻されるかのように見えたが、そうはならなかった。日本はモンゴル人のための「特殊行政区域」として「興安(四)省」を設けたが、その範囲は非開放蒙地に限定され、県がおかれている農地(開放蒙地)は、そのまま他省の管轄下におかれた。こうして開墾による

分断、分割状態は既成事実化されていった。

現在東北三省にあるいくつかのモンゴル族自治県は、これら「省外」諸旗の地域に設けられている。しかし、満洲国時代まではそのまま残されていたいくつかの「旗」が廃止され、一般の「県」になった場合もある。ブレンサインは、清朝末期までさかのぼってこうしたプロセスを検証するとともに、ここに暮らすモンゴル族の内モンゴル自治区への微妙なまなざしを含めて、現在のありようをさまざまな方面から考察している。加えて、清朝期に「旗人」として清朝を支え、辛亥革命以降その姿が見えにくくなっている「モンゴル旗人」のその後をここ数年の現地調査の成果を踏まえ、跡づけている。

第2章のユ論文は、1950年代の「民族識別工作」によって独自の民族として認定され、中国を構成する少数民族の一つとして再出発することになった「ダウール族」に対する識別そのもののプロセスと、それを踏まえて行われた「自治区域」設定をめぐる複雑な政治過程をとおして、建国直後の新しい民族政策やその変質によってもたらされた民族関係のありようを実証的に検討しようとしたものである。

ダウール人が、同じくモンゴル語族の言語を有し、辛亥革命以降、「蒙系」としてモンゴル人の独立や革命運動に大きな足跡を残しながらも、「モンゴル人」との歴史的な関係は必ずしも明らかになっていない。かれらが識別の結果として「ダウール族」となったのも、かれらが清朝に服属し、仕えるようになる17世紀以前の歩みは確認できないうえ、17世紀以降は、他の民族集団と判然と区別される独自の民族としての道を歩んできたことは明らかであることが決定的な理由であった。そして、ダウールが20世紀に「蒙系」となったことについては、大きな「五族」の「共和」または「協和」が謳われた中華民国期や満洲国期においては、「五族」以外の小さな民族が生きる道は、「五族」のなかでより近い関係にある一つの民族に入り込むしかない、という状況のもとでのやむを得ない選択であったとされた。こうした見方を大多数

のダウール人が支持したことは確かなようだが、ここには日本敗戦以後の政治情勢のなかでいっそう複雑化した民族関係が微妙にかかわっていた。しかし、かれら大多数のダウール人が独自の民族になることによって実現できると期待した「区域自治」を中心とする新しい民族生活は、容易には進まず、文字どおり、波瀾万丈の展開をしていった。第2章ではこうしたプロセスを、入手可能な限りの資料を用いて詳細に跡づけている。

ところで、国境を含むさまざまな「境界」によって同族と引き離されてしまったと受けとめた人々にとって「境界」は本意なものであり、それを可能な限り崩そうとしたり、そこまではしなくとも、「境界」によって遮断される部分をつなげようとするのは当然といえる。また、こうした再統合の推進においては、それをより効果的に推し進めるために、当該地域やそれが含まれている国家に利害関心をもつ第三の国家の援助に期待する場合も多く、一方、その第三国が、「境界」に引き裂かれている人々のこうした気持ちや営みを積極的に利用しようとする場合もある。本書第2部の2つの論文はこうした、いわば「国境を行き交う」形で取り結ばれる関係性を取り上げている。

第3章の青木論文は、このうち、後者の代表的な例として、1910年代末から20年代半ばにかけてのロシア（ソ連）およびコミンテルンが「モンゴル世界」へアプローチしたプロセスを跡づけている。もとよりこの関係は一方通行的なものではなく、ロシア、またはコミンテルンを利用してモンゴル世界の再統合を実現しようとした「モンゴル人」側の主体的な営みを前提とするものである。しかし、世界革命を夢見つつ成立したロシアといえども、自らの国益を重んじる国家であり、これは実質上、その国家のコントロールのもとにあったコミンテルンも同様であった。一方、「境界」に引き裂かれた「モンゴル世界」のなかにもさまざまな距離や違いがあったために、モンゴル人としての統一的な対応は容易ではなかった。青木論文は、「境界」によってもたらされたこうした状況を内に抱えた「モンゴル世界」とロシア・コミンテ

ルン側との複雑な関係のありようを、ロシアやモンゴル国の未公開史料をも駆使しながら跡づけている。国境にまたがるモンゴル人同士の関係や、そのなかでのソ連及びコミンテルンの関係については、これまでもさまざま論じられてきたが、視野を「モンゴル世界」全体までに広げて論じる試みはおそらくこの青木論文が初めてであるかもしれない。

第4章のテグス論文は、国境によって引き裂かれた内外モンゴル間の距離を縮めるべく、言語の統一を目ざしつつも、ひとまずは文字の統一を試みた1950年代の中国側のモンゴル人たちの営みを取り上げ、その様子と挫折の経過を跡づけている。すでに国境の向こうのモンゴル人民共和国（「外モンゴル」）においては、この時点でソ連の影響のもとでキリル文字化を実現していた。また、ロシア領のモンゴル人地域のブリヤート、カルムイクにおいてはそれ以前にキリル文字への切り替えが終わっていた。もっとも、中国で国境の向こうの同族に合わせる形でキリル文字化が進められたのは、それをよしとする中国の当時の民族政策があってこそ可能であった。しかし、1957年に始まった反右派闘争やそれに続く「地方民族主義」に反対する政治運動のなかで運動は中止され、それまで使われてきたもとの伝統的な文字に戻された。この運動に対しては、そもそも中ソ関係の緊密化の中で始まり、その関係の悪化を受けて中止されたとする見解があるが、そうではなく、モンゴル人自身の主体的な営みとして運動を捉え直す点、国境にまたがる民族同士の交流や一体化を危険視することになった中国当局の民族政策の転換に中止の原因を求めた点にこの論文の新しさがある。

特論1の佐治論文は、内モンゴルのモンゴル語作家リゲデンの作品を通して、内モンゴルの文学世界と遊牧民の生活を紹介しようとするものである。漢人の文学を中心に中国文学を研究してきた佐治は、自分とモンゴル世界、リゲデンとの出会いや、それを契機として「中国の少数民族としてのモンゴル族の文学」といった時の範囲や概念を検討し、「モンゴル族文学」とは中国のモン

ゴル族がモンゴル族を主たる読者対象として書いた文学である、という結論に至るまでの経緯を述べている。そのうえ、リグデンの作家としての歩みを略述し、「生活の論理」、「ああ、私のインツレン」、「長寿の祝い」、「アリ王国旅行記」、「口吻——信仰の朦朧は闇夜の朦朧より恐ろしい」、「斧・狗・人」等の主要作品を分析し、その深い思索性およびリグデン作品と漢族との関わりを考察している。最後に、遊牧地域における文化大革命および新内モンゴル人民革命党冤罪事件を正面から描いた代表作、長編小説『地球宣言——大捜求』を翻訳するに至った経緯、作品の意味を概略し、巻末に参考資料としてその序を記載した。この『地球宣言』は、ブレンサインとの共訳で、近々出版される予定である。

最後に、特論2の松枝論文は、その表題のとおり、日本における「東洋史」の成立を扱ったものである。司馬遷以来の中国の歴史書・地理書は日本に早くからもたらされ、幕末に至るまでその移入は連綿としておこなわれつづけていた。こと歴史学においては、あくまで中国の歴史が中心であって、国史や史伝の成立についてもお手本は中国であった。しかし、明治の開国以降、西欧の諸科学が直接日本に伝わるや、日本はまったく新たなアジア史を組み立てる必要を迫られた。そこには政治・軍事上の要請があり、また西欧史と向きあうための東洋史が方法論的にも求められたからである。そのとき注目された空間がモンゴルをはじめとする中央アジアであり、それはそのまま歴史上の空白地帯（塞外）を争奪する派遣闘争の体をなした。本論は、こうした「東洋史」なるものがどのように醸成されていったかを、モンゴルを核として素描し、再考しようとするものである。

本書は特論2本を含め、2000年度から2003年度の4年間にわたって、和光大学総合文化研究所のプロジェクトとして行われた共同研究「多国家（分散・分断）民族における内なる民族関係（代表：ユ・ヒョジョン）」の成果の一部をもとにし、2人の若い研究者の論文を加え、書名のようにテーマを新たに設定してまとめ

たものである。ちなみに、同プロジェクトは、日本私学振興財団および学校法人和光学園の助成を受けて1995年度から1997年度まで3年間にわたって行われた共同研究「モンゴルの変容する社会と文化の諸相——異文化との接触を視野におさめて（代表：三橋修）」（その成果は、1999年に『変容するモンゴル世界——国境にまたがる民』として新幹社より刊行）に参加した数人の所員に新たに学内外の研究者数人を加えて組織されたものである。

99年に刊行した本は、その書名からも明らかなように、各国、各地域にまたがって暮らすモンゴル人のそれぞれの地におけるほかの諸民族との接触を視野に入れつつ、モンゴル人としてのありようの変容をとらえようとした。本書はその問題関心を受け継ぎつつも、「境界」そのもののありように注目し、それとの関係を軸に「境界」に生きる人々それぞれの生き様や生きる道への模索、そして「境界」の向こうへのさまざまな思いやまなざしを、20世紀という時代の流れのなかで見つめようとしたものである。